大阪湾に渡来する稀なるシギ・チドリ類に就て(1)

On some rare waders (Limicolae) recorded from Ōsaka Bay coast

小 林 桂 助

Keisuke Kobayashi

私は 1950 年 1 月以降本年 (1954 年) 6 月に至る 4 年半の間、大阪湾の大和川河口部に近い南港埋立地並にその附近に於て、シギ・チドリ類の調査を続けて来た。

南港埋立地は住吉川と大和川とに挟まれた住吉浦の先端に位する方約 1 軒の埋立地であり、南港橋に依つて陸地と連絡されている。1940 年頃より大阪港の延長としてサンドポンプに依つて土を盛り上げて埋立を開始、1941 年 8 月漸く南港橋から 300 米迄の埋立が完成した時には既に大阪港防備の高射砲隊並に哨空隊の陣地として砲列が敷かれ、バラツク兵舎が建ち並んだ。埋立は其後も続けられ 1942 年頃、漸く現在の形が完成したが、当時是一般人の入場を許されぬままに終戦を迎えたのである。敗戦によつて兵隊の立去つたあとの兵舎は漁夫の宿舎に利用されていたが、1950 年 9 月 3 日のジェーン台風の為、バラツクは一瞬にして破壊流失、逃げ遅れた婦女子 14 名の貴い犠牲者さえ出している。

大阪市とその附近を流れて大阪湾に流入する各河川は上流より土砂を流して河床は年々高くなり、反対に河口部一帯に於ては土地は年々沈下して行く傾向がある。1948 年著者が初めて南港を訪れた時と今日とでは満潮線の位置によつても、埋立地が明に沈下している事を認める事が出来る程である。

干潮時には南港埋立地の北側半分程は干潟となつてあらわれるが、満潮時には満々と海水をたたえた入江となる様な事は 1948 年当時には見る事が出来なかつた現象である。

サンドポンプで埋立した上に石炭殻を積み一段と高くなつた東側と南側約半分はセツカヤヒバリの多数棲息するチガヤ・カニツリグサ・ススキの原野

となつているが、西方に移るに従い土地は低く、埋立てたままの粘土質の湿原になつて居り、そこには七面草(*Suaeda japonica*)が一面に繁つている。この高台と低地との境界のあたりは一段と低地となつて居り、雨水をたたえて、淡水池を形成している所が三ヶ所程あり、最大のものでは長さ 100 米幅 20 米にも及んでいる。空襲時にはこの陣地も爆弾に見舞われ、大形爆弾によつて穿たれた円形の穴が水溜となつた所も数ヶ所ある。これ等の池の周囲部には今日ではヨシが深く生い繁り、カルガモ・バン・ヒクイナ・オオヨシキリ・ヨシゴイ等の恰好の蕃殖地となつて居り春期と秋期とにはトモエガモ・ヒドリガモ・シマアジ・オナガガモ等の休息所ともなつている。

海に面した砂と粘土の浜、南港周辺の所々に積み上げられたコンクリート製の土台石や天然岩石、又北側半分程を占める広大な干潟は、春秋の候にはシギ・チドリ類の絶好の渡来地であり又淡水を好む種類は、前記の淡水池だの、七面草の生い繁つた湿原にも集るので、此処南港一帯はシギ・チドリ類の渡りの調査には誠に適当な所である。

南港橋迄に至る住吉浦には、戦前には火薬庫が二ヶ所あつた。堀と堤防とに依つて囲まれ、附近は一面の葭原と湿性の荒地とで、立入りを許されなかつた所であつたので、此処にも沢山のシギ・チドリ類が渡来した。然し戦後直ちに火薬庫は取こわされ、荒地や葭原は或は埋立てて製材工場が建ち、又一部は更に堀り下げて池となり、住吉川に閘門を開く貯水場として利用され、環境は全く一変した。今日ではシギ・チドリ類の渡来地には到底なり得ない所である。

只南港橋によつて劃された南港一角のみが今尙終戦直後のままの姿で取残された唯一の地である。従つて附近に渡来するシギ・チドリ類は、今日ではその殆んどが南港に集ると云つても過言ではなく、この地えの春秋の渡来を数量的に調査する上に於ても、大体の趨勢を伺い知る事の出来る便宜もある。

この調査は更に繼續して、追て稿を改めて結果を発表する積りであるが、過去四年半の観察回数は以下の表の示す通り各月を通じて総数 173 回、記録する事の出来たシギ・チドリ類は下記目録の通り 38 種に及んでいる。

一体シギ・チドリ類は夏羽・冬羽・幼鳥並びにそれ等の中間のもの等、それぞれ羽衣を異にする為、他類の鳥に比し、野外観察には綿密な注意を必要とする。種類に依つては、採集して標本を手にしなければ、種類を確める事

の困難なものも多い。調査の正確を期する為、本篇に取扱つた各種は尠く共

年 次 別 ・ 月 別 観 察 表

	1950	1951	1952	1953	1954	合 計
1 月	3	1	2	0	1	7
2 月	0	1	1	1	1	4
3 月	5	3	3	2	1	14
4 月	8	6	4	4	4	26
5 月	5	6	4	3*	5	23
6 月	2	3	3	2*	4	14
7 月	1	4	2	3*		10
8 月	7	5	6	4		22
9 月	8	5	3	4		20
10 月	7	3	4	3		17
11 月	3	2	2	2		9
12	4	1	1	1		7
合 計	53	40	35	29	16	173

* 印は筆者外遊中にてこの間の記録は坂根干氏による。

目 録

1) <i>Lobipes lobatus</i>	14) <i>Numenius arquata orientalis</i>
2) <i>Tringa ocropus</i>	15) <i>Numenius madagascariensis</i>
3) <i>Tringa glareola</i>	16) <i>Numenius phaeopus variegatus</i>
4) <i>Tringa incana brevipes</i>	17) <i>Calidris canutus canutus</i>
5) <i>Tringa hypoleucos</i>	18) <i>Calidris tenuirostris</i>
6) <i>Tringa erythropus</i>	19) <i>Calidris ferruginea</i>
7) <i>Tringa totanus eurhinus</i>	20) <i>Calidris alpina sakhalina</i>
8) <i>Tringa stagnatilis</i>	21) <i>Calidris ruficollis ruficollis</i>
9) <i>Tringa nebularia</i>	22) <i>Calidris minutilla subminuta</i>
10) <i>Pseudototanus guttifer</i>	23) <i>Calidris acuminata</i>
11) <i>Xenus cinereus</i>	24) <i>Limicola falcinellus sibirica</i>
12) <i>Limosa limosa melanuroides</i>	25) <i>Crocethia alba</i>
13) <i>Limosa lapponica baueri</i>	26) <i>Capella gallinago gallinago</i>

27) <i>Capella megal</i> a	33) <i>Charadrius alexandrinus dealbatus</i>
28) <i>Rostratula benghalensis bengha-</i>
<i>lensis</i>	34) <i>Charadrius dubius curonicus</i>
29) <i>Squatarola squatarola</i>	35) <i>Vanellus vanellus</i>
30) <i>Charadrius dominicus fulvus</i>	36) <i>Himantopus himantopus hima-</i>
<i>ntopus</i>
31) <i>Charadrius leschenaultii</i>	37) <i>Arenaria interpres interpres</i>
<i>leschenaultii</i>	38) <i>Glareola pratincola maldivarum</i>
32) <i>Charadrius mongolus stegmanii</i>	

一回以上は此地に於て自ら採集したもののみである事を附記しておく。

尙以上の他、採集する事が出来なかつた為に本目録から除外したが、エリマキシギ? *Philomachus pugnax* (2♀♀ or 2 juv.? 1954 年 6 月 27 日観察) コシギ? *Lymnocyptes minima* (1950 年 9 月 24 日 2 羽—本種は伊丹昆陽池に於て 1951 年 10 月 30 日及 1952 年 10 月 22 日に各 1 羽宛採集された記録がある。) 等が観察され、又 Jahn 氏はヘラシギ *Eurynorhynchus pygmeus* を (1940 年 9 月 22 日) 観察して居られる。又ケリ *Microsarcops cinerea* やオジロトウネン *Calidris temminckii* も伊丹の昆陽池附近では少数乍ら年々見られる種類であるから、南港に於ても海岸に近い池や湿原では将来採集される可能性のある種類である。今後数年に亘りこの調査を継続すれば更に種類を増す事と思われるが、とりあえず本篇には上記目録中、従来日本各地よりの記録の比較的少ないもの 9 種類について報告する事とする。

I. コアオアシシギ *Tringa stagnatilis*

観察及採集。

1953 年 9 月 6 日 2 羽観察採集。

1953 年 9 月 13 日 2 羽観察 中 1 羽採集。

第 1 標本。♀ juv. 海上を飛翔していた本種 1 羽とアオアシシギ 2 羽とが干潟の水際に着陸した所を採集。

第 2 標本。♀ juv. アオアシシギ 1 羽と共に干潟に近い浅い淡水池で採餌中のものを採集。

第 3 標本。♀ juv. アオアシシギ 1 羽と共に前記と同じ池にて採餌中のものを採集。他の 1 羽は干潟上空を 4 羽のアオアシシギと共に飛翔していた。

測 定

性 別	採 集 年 月 日	嘴 峰	翼 長	附 臙	尾 長
♀ juv	1953 年 9 月 6 日	43	135	51	57
♀ juv	同	41.5	135	49	55
♀ juv	1953 年 9 月 13 日	42	138	52	56

三点共雌成鳥冬羽に似ているが雨覆冬羽の羽緑黄白色なる点に依つて第一年目の冬羽と推定される。嘴は蒼黒色、脚は暗緑色である。

習 性

野外に於ける習性はアオアシシギと極めて酷似して居り、海浜や浅池に下りて居るものは之を一廻り小型にしただけである。只脚の割合はアオアシシギより遙に長い。飛翔時も頸を長く突き出し、脚は尾りよ遙に長く後方に延ばしている。下面と腰の白色が顯著である。

コアオアシシギ冬羽

毎回アオアシシギと共に観察しているのでその大きさに依つて直ちに本種を識別する事が出来た。飛翔中にも採餌中にも一回も鳴声をきく事は出来なかつた。

食 性

第一標本より検出した食餌は何れも小型の巻貝類であり、京都大学理学部動物学教室に依頼した同定の結果は次の通りであつた。

ウミミヅゴマツボ (新称) *Stenothyra edogawensis* (Yokoyama) 83 個

カワグチツボ *Fluvocingula nipponica* Kuroda 1 個

カワザンシヨウガイ *Assimineea japonica* (v. Marteus) 1 個
 タマキビ *Littorivaga brevicula* (Philippi) 7 個

本種が日本から記録されたのは過去に於て只 1 回である。即 1882 年アラン・オーストン氏が横浜の市場に於て入手した標本に基いて、ブラキストン及プライヤー氏が産地横浜附近として記録して以来今日に至る迄日本からは全く報告がなかつた。それから約 70 年を経過して初めて第二回目の標本が採集された事は誠に珍しい事である。本種は日本には極めて稀に渡来する鳥であると考えられる。

又日本周辺(旧日本)よりの記録も極めて尠く、樺太よりは栄浜(1914年 5 月)朝鮮よりは京畿道(1923 年 10 月 5 日)咸鏡北道(1917 年 8 月 19 日)又台湾よりは台南(1861 年 8 月及 1932 年 12 月 18 日)等が知られているに過ぎない。

尙 1953 年の秋には本種は日本各地に渡来したらしく、上記以外に、東京湾千葉浦安の海岸にて橘川、森岡の両氏が 10 月 11 日に約 20 羽の 1 群を水田中にて観察され、又 9 月には小林平一氏も姫路附近白浜海岸にて 1 羽を観察された由である。

日本から最初の標本が記録されて以来 70 年振に再び比較的数多くのものが各地で観察されているのは珍しい事と思う。

II カラフトアオアシシギ *Pseudototanus guttifer*

観察及採集。

1954 年 5 月 40 日 1 羽観察採集

測 定

性 別	採 集 年 月 日	嘴 峰	翼 長	跗 蹠	尾 長
♀	1954年 5 月30日	55 mm	168 mm	46 mm	69 mm

冬羽の粧にて卵巢の測定は 9 mm×5 mm、最大卵の直径は 2 mm であつた。

嘴は中央より先端は蒼黒色にて基部は暗黄緑色、嘴の基部幅及厚さ共アオ

アシシギより遙に太く、先端もアオアシシギ程反り上つていない。脚は前記

カラフトアオアシシギ冬羽

測定の通りアオアシシギより著しく短くキアシシギの脚よりも著しく緑色を帯びた黄緑色である。内趾と外趾とは基部に於て膜にて中趾と連続している。

習性

干潟上に単独にて居り、前面からは殆ど純白色に見え且脚が短い為、当日附近に散見されたアジサシと混同する位であつた。飛翔すると腰の白色部は顯著

であるが、アオアシシギ程脚長からず、むしろダイゼン位の大きさに見える。声はきく事が出来なかつた。

食性

イワガニ類の小片を検出する事が出来た。

本種も本邦には極めて稀に渡来するものであり従来僅に以下の記録があるに過ぎない。

北海道：室蘭。1893 年 9 月。札幌博物館蔵。

本 州：神奈川県六郷川口。1915 年 9 月 23 日。黒田長禮博士採集。

”：三重県度会郡宮川河口。1953 年 9 月 8 日。橋本太郎氏採集。

九 州：薩摩 1918 年 9 月 15 日。鷹司信輔博士報。

之等の記録は何れも 9 月中に採集された秋期の渡りのものであるが、春期の渡りの記録としては今回が初めてである。

一体日本に渡来するシギ・チドリ類の中で従来迷鳥又は極めて稀に記録された種類は、秋期の渡りに幼鳥である場合が圧倒的に多い。之は蕃殖期後の

幼鳥が南下の途中、何らかの都合で渡りの経路を誤つて日本列島を経由するものと思われる。依つて、若し本種を日本への迷鳥とするなれば、今回の様に蕃殖地への北上の途中に本種が渡来する事は極めて面白い例と思われる。

本種の蕃殖地に就ては「鳥」43号に黒田長禮博士が詳細に述べて居られる通り、従来確實なる蕃殖地として知られたのは南樺太留多賀町附近のみである。東部シベリヤからカムチャツカ方面を長年に亘り、採集旅行をしたソビエツト連邦の鳥学者 Hans Johansen 博士も本種を自身野外にて觀察した事は一回もないと云つてゐるし、又同じソ連の鳥学者 S. A. Sladkov 氏の“Pticy SSSR” (Moskua 1951) に依れば“幼鳥は南樺太にて発見された事がある。”とのみで詳細の記述はない。依つて岡田宜一氏の発見された留多賀町附近の本種の蕃殖地は現在世界に知られた本種の唯一の場所であると云う事が出来よう。

同氏の報告に依るとその附近には比較的多数のものが見られる様であるが、ソ連邦領内の各地に於ては本種は比較的稀なものであるらしい。前記 A. S. Sladkov 氏に依れば下記の採集觀察記録があるに過ぎない。

Okhotsk 河口	7 月
Gishiga 附近	8 月 2 日。3 羽觀察
Bering 島	5 月 22 日
Kamtchatcka の Avatcha 河河口	5 月 27 日
Sakhalin の Chaivo 潟	♀ imm. 8 月 7 日 ♀ ad. 8 月 8 日
ウラジオストク附近の Amur 湾	1848 年 9 月 1 日及 12 日 (Vorobiew 氏に依る)
Amur 河河口の Langre 島	標本二点 (5 月及 8 月)
Ussuriland の Khanka 湖	標本二点 (8 月 27 日及 9 月 2 日)

本種は冬期には日本列島や支那大陸沿岸に沿ひ馬來・ビルマ・カルカッタ附近に迄渡る様であるが、之等越冬地に於て採集された数も極めて尠い。又その経路にあたる各地の記録としては前記日本のもの以外に以下のものが知られている。

朝 鮮：咸鏡北道新浦 1912 年 9 月 13 日。1 点

台 湾：高雄州 1922 年 11 月 1 日。1 点
中 華 民 国：福 州 1886 年 11 月 21 日。1 点
海南島 1890 年? 2 月 3 日。2 点 (♂ ♀)
其他に 1, 2 点が知られているのみ。

本種は標本を手にして見ると、アオアシシギに酷似している為に、野外に於ても之と混同されてその記録が意外に尠いのではないかともいわれているが、筆者の経験に依れば、野外に於ても一見して、本種はアオアシシギとは区別する事の出来る鳥である。にもかかわらず、本種の蕃殖地から越冬地への経路と考えられる支那大陸に於ても、又日本列島に於ても従来の記録が意外に尠い所を見ると、この鳥は長途の渡りをするシギ・チドリ類の中では極めて稀なものの一つであると考えられる。又採集された標本の数から見ても日本列島と支那大陸とは略同数であり、この何れもが通常の渡りの経路と考えられ、日本列島にあらわれるものは決して迷行したものではなく、年々少数のものが、春秋の渡りに通過するものではないだろうか。(以下次号)

コクマルガラス・ホオジロハクセキレイの新産地

On new specimen records of *Corvus monedula* *dauuricus* and *Motacilla alba leucopsis*

田 代 道 彌

Michiya Tashiro

神奈川県立小田原高校の生物教室には現在約 150 箇の鳥類剥製標本が所蔵されている。筆者は本校在学中 1951 年より此等の標本の調査整理に着手し、コクマルガラス・ホオジロハクセキレイの二標本を発見したので茲に報告する。比等の標本は明治末期より大正時代に亘つて、元当校教諭伊藤和貴氏の蒐集せられたものが主である。調査を御援助下された松浦茂寿先生、近藤正樹君に御礼申上げる。